
犬と猫

香箱

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

犬と猫

【Nコード】

N8844Y

【作者名】

香箱

【あらすじ】

そうだ、京都へ行こう！

第一幕

想像して欲しい。暫く履いていなかったジーンズを引つ張り出し、足を通して、何となくポケットに手をつ込んでみる。すると、指先がポケットの奥で何かに触れ、摘まみ出せば、絡まった糸屑が指の間でぷらぷらと揺れている。

…大学における僕の立ち位置は、そのジーンズの構成要素において、件の糸屑と同等と想ってくれていい。

カンカン照りの九月の空を恨めしく見上げながら、駐車場から大学への道を歩く。

晴れた空は嫌いなのだ。インドア派の僕の、まるで絹のように繊細な肌には、殺人光線ばりの直射日光は痛くて仕方がないし、「さあ今日もさわやかな一日だよ!」と、こちらの機嫌も考えずに一方的に押し付けて来るデリカシーのない青さも気に食わない。

僕としてはこんな日は一刻も早く我が心のオアシスことエアコンの効いた講義室に辿り着きたいのだけど、駐車場から大学の構内まではそこそこの距離があり、そのそこそこに長い道のりを、道幅一杯に並んだ学生達が占領し、談笑しながらのろのろ歩いているものだから、僕もまた牛歩戦術中の先生方のごとく、仏頂面でのろのろと歩くしかないのだ。「君も学友と話せばいいではないか」と問う向きもあるだろう。しかし残念ながら、流石の僕も虚空と語り合うスキルは今のところ未習得となっている。

けれど眺めるにつれ、不思議にも思う。毎日毎日、飽きもせず、彼らは何を話しているのだろうか。

思うに、さして中身のあることは話してはいまい。耳に入り込む断片から察するに、恐らくふわふわとして、甘く、楽しげな、マシユマロのようなことを話しているのだろう。

… まったく、実に嘆かわしい。モラトリウムにおける青年の正しい有り様とは、内なる自己との対話、そして真理の追求にあるのではなかったか。それらの苦悩、煩悶の果てにこそ、人は確固たる自己を確立し得るのだ。第一、そんな風に年がら年中ペチャクチャしていては、舌の根どころか脳まで乾いて味噌がスルメと化してしまうのではなからうか。

… しかし僕の心配をよそに、前列では相変わらずにふわふわキヤハハとマシユマロトークが続いているのである。

学生達の未来に要らぬ心配を巡らせている間に大学の建物が見えてくる。

蟻の巢の入口のような裏門を抜けて、僕はB棟のドアをくぐる。天使の抱擁のようにふわりと冷気が僕を包む。うむ、心地よい。喫煙所が近いからいささかヤニ臭い天使だが、そこはご愛敬だ。

定刻も近い。颯爽と階段を駆け上がり、二階の講義室に駆け込む。空いた机に滑り込んで、ルーブリーフのノートを開く。やがて肅々とした雰囲気のある場に老教授が聖人のように背後のドアを割り現れて、いよいよ有難い講義が始まる。

だが直後、教授の余りの滑舌の悪さに僕は卒倒した。

…起きた。いつもながら酷い目にあった。滑舌の悪い人間は講義など受け持つべきではないと思う。

まあ、何を言っているか分からないが、きっとあの老教授はその欠点を補って余りある、広大にして深淵なる知識を有した名教授なのだろう。

そこから発せられる学問的オーラを一身に浴びるだけでも、低血圧改善、新陳代謝の増進、偏頭痛の解消など、種々の有難い効果があるに違いない。

ともかく勉強の時間はひとまず終わった。さあいざ赴かん、麗しの図書館へ！

僕の学生生活を語るにあたって、図書館を語るとは避けては通れないだろう。

むしろ図書館を語ればこと足りるとも言える。

図書館は大学の正面口から見て左手にある。深いグレイの壁と縦に切れ込んだアートな窓が印象的な建物だ。

一回生の頃はその余りにアカデミックな空気に気圧され、必要最低限にしか足を運ばなかったものだが、死んだ魚の目がデフォルトの2回生となり、その糠床のように熟成された眼力で僕はそこに二つの楽園を見出した。

即ち、勉強用の半個室とパソコンコーナーである。

勉強用の半個室は駄目学生の仮眠のためにあるとも言っている。素敵スポットであるから説明は不要として、パソコンコーナーの素晴らしい話を語るには、僕の置かれた孤高かつ不毛、不毛かつ孤高な現状について説明するべきであろう。

説明する。説明するぞ。そう。あれだ。要するに。言えなれば。結局のところ。僕は…

「ぼっち」、なのである。

「ぼっち」とは、独りぼっちから生じた俗語であり、主に学生のコミュニティにおいて絶海の孤島と化した存在を指す絶望ワードである。

絶望ワードの名に恥じず、その称号は一度張り付くやいなや、しつこい油污れも真っ青の強情さで付きまとい、薔薇色の学園生活を容赦なく黒一色に塗り潰していくであろう…と学生達に古来より伝わり、心底恐れられている。

…僕はツチノコやチュパブラと並び、そんな伝説的な存在と化してしまったのだ。

とはいえ、僕も大学生になるまでは「ぼっち」であつた訳ではないし、それなりに新生活に希望を抱きこの大学へとやって来た。

それが、何かおかしいぞと感じ始めたのは入学3ヶ月後。そして

半月後、予感は確信へと変わった。

心の中の師、曰く「お前には新しいコミュニティーに入り込むスキルが絶望的に欠如している」。ごもつともである。だが、この師の問題点は、問題を教えてはくれても、解決法までは教えてくれないことだ。

…ともかく、小中高と片田舎にある学校に通ってきたこともあり、クラス替えもろくになく、周りにいたのはいつも同じ面子だった。こちらから働き掛けなくとも、いつの間にか僕は輪の中にいたし、騒ぐのも嫌いじゃなかった。

だから、僕は自身のその欠点に気付けなかったのだ。

さて、知る人は知っていようが、一見していかに賑やかで楽しげに見えようとも、大学とは人間関係こそがものを言う、サバンナも真っ青の弱肉強食の世界である。

俗にリア充と呼ばれる、ゾウやキリン、シマウマにライオン、その他諸々の強大な生き物の影に怯えながら、俗にコミュ障と呼ばれる、カエルやトカゲ、ネズミやミミズだって実はひっそり慎ましかに暮らしているものだ。

そして、そんなヒエラルキーのスタートラインにすら立っていない僕は、世界に放り出された一匹の金魚であった。

競争以前に慣れない地上で口をパクパクさせ、座して死を待つのみといった案配だったのである。

…別に独りは嫌いでもないが、周囲が賑やかなせいか、それがやたらにチクチクと身を刺す。

お隣さんが宝くじに当たったようなもので、気にしなければいいのに、そこは人の悲しさ。幸せそうな他者が四六時中溢れていると、感じたくもない卑屈さが滲んでくるものだ。

負のオーラは更に人々を遠ざけ、それが性根を更にひん曲げる。鬱屈とした無限ループ。いや、時計のように回転し続ける性根と、深まる人恋しさの「ぼっちスパイラル」とでも呼ぼうか。僕はベートーベンも裸足で逃げ出すような苦悩の日々を送っていた。

恐らくあの頃の僕を霊能力者が目撃したのなら、即座にあらん限りの聖水をぶちまけたに違いない。そして僕はシューシューと白煙を上げ、消え失せたことであろう。

とかくそんな折、僕はあるサイトに出会った。そして、そこにどうにか正気を保ち得る僅かな道を見出し、パソコンコーナーへ入り浸るようになったのだ。

いつものようにパソコンコーナーの受付を済ませた僕は、ポータルサイトの検索窓に「フクロウ亭」と入力し、その粗末なサイトの簡易チャットへ潜り込む。

メッセージ：kenさんが入室しました

ken：世界よ滅べ！

メッセージ：夢猫さんが入室しました

夢猫：滅ぶんならお一人でどうぞ、先輩

ken：寂しいではないか

夢猫：なんなら僕のフィギュアもお供につけましようか？

ken：せつなくなら生身がいい…

夢猫：贅沢ですね。先輩にお似合いの生身なんて、このマグロのお刺身がせいぜいでしょーに。（ヒラヒラ）

ken：ぬ！ 貴様昼からマグロなんて食ってるのか！ 引きこもりの癖に！ よこせ！ 今すぐよこせ！

夢猫：いーですよー。取りにいらっしやいな。ほーれほーれ。（ヒラヒラ）

ken：おーのーれー

—
なんだこの現状は、と自分でも思う。

だが、僕を「先輩」と呼び、ほとんど常にチャットを監視しているらしいこの変人だけが、今の僕にとって、唯一の他者との繋がりになっていた。

夢猫：この容姿端麗な男前を捕まえて、変人とはなんですか、変人とは！

ken：だつて変人だろ？

チャットじゃ顔も見えないしなあ。ひよつとして容姿端麗つてより妖怪人間つて方が近いんじゃない？。

夢猫：ムキー！先輩！今すぐ京都へ来たまえ！

ken：えー、無理無理。

夢猫：でも、どうせ先輩、相変わらず白黒コピーみたいな味気ない生活しとるんでしょ？

夢猫：学生さんは時間あるんやから、どこか旅行でもしとくと良いですよ、ほんと。

ken：…んー。

夢猫：（もぐもぐ）

ken：…考えとくわ。ってまだ昼飯食つとるんかい！

夢猫：欧米型のスローライフを実践しとりまして、ランチタイムには一時間以上かけるようにしとるんですよ（もぐもぐ）

ken：引きこもりはこれだからなオイ。
んじゃ、講義行ってくるわ。

夢猫：はいな、お疲れ様です。

メッセージ：kenさんが退室しました

メッセージ：夢猫さんが退室しました

説明はこんなものでいいだろうか。以上が僕の暗澹たる、そして少し風変わりな大学生活だ。

大学から目を離すと、他には二つ程しか語ることはない。

まず一つは、アルバイトのこと。

家から近いこともあり、僕はとある繁華街のコンビニでアルバイトをしている。

夜の時間帯が担当で、繁華街なこともあり、客層は余り良くないが、反面マイナーチェーンなため規則もゆるゆるだ。

ゆるゆるの魅力と、僕の好青年らしい責任感の強さ、持ち前の保守的傾向もあり、何だかんだで二年ほど働き続けている。

お客さん以外に顔を合わせるのは、稀に顔を出す店長と、年上の同僚の渡辺さん、そして同い年の同僚の『究極の堅物』こと須田さんくらいなものだ。

その日は渡辺さんのシフトで、今日も今日とてせっせと労働に

励んでいたのだけど。どうも集中出来なかった。

昼間、夢猫のやつに言われた旅行のことが気になっていたらしい。らしくもなく弁当のソースをレンジで爆発させて、酔っ払ったサラリーマンに平謝りしたり、商品の段ボールを落としかけて冷や汗を流したり、散々な有り様だった。

余りの様子に渡辺さんも気付いたらしく、帰りがけ「どうしたのよ今日は？」と話しかけられた。

渡辺さんは、年齢は30代中盤ほどだろうか。仕事を掛け持ちしているらしく、いつも眠そうな目をしている。

家族はおらず、気儘なる独り暮らしを楽しんでいるそうだ。あちこちに知り合いがいるようで、よくお客さんと親しげに話しているのを見掛ける。

バイト先には僕より後に入ってきたものの、長年の修行により力の抜き方の秘法を習得しているらしく。仕事に粗はないのに、何故か渡辺さんと組むと僕の仕事量が1・5倍になるナイスガイだ。

ここは年長者の意見を聞いてみるのもいいかも知れぬ、そう思いチャットのことは隠して、京都へ友人に会いに行くか迷っていると渡辺さんに打ち明けたところ、「恋かね？若いね！おじさん応援しちゃうよー」と件の眠たい目のまま、てんで検討違いなことを言われた。

…ダメだコイツ、と思った。

残る一つは家のこと……と言おうとして、僕はふと一つ語り忘れていたことに気付く。

それは、アルバイトの帰り道のこと。アルバイトが終わるのはすっかり深夜で、流石の繁華街もピーク時の騒がしさは収まり、どこことなくしっとり気だるげな雰囲気満ちている。

仕事上がりの解放感を抱え、疎らな人びとの間を歩き、艶やかな提灯の赤やネオンの躍る店構えを見て歩くのは、なんとなくこそばゆい気持ちにして、好きな時間だったりするのだ。

…そうして後には、惰眠を貪るか、本を読んでいるか、悶々と思いつくかの家が待っているだけである。

その日も僕は早々に寢床に潜り込み、けれどいつもとは違い、布団の中で目だけを爛々と輝かせていた。

旅行：ああ旅行である。思えば、確かに僕に足りなかったのは旅行かも知れぬ。進学校であったこともあり、高校の修学旅行は多数決で中止になったから、振り返れば、旅行らしい旅行は中学の修学旅行以来記憶にない。

非日常の甘い囁き。暗い現実など放り出して、見知らぬ土地を歩き、見知らぬ土地の空気を胸一杯に吸い、名物料理を食べよう。ついでに夢猫のやつにも土産の一つでも持って行ってやろう。

旅先での思わぬ出会いもあったりしちゃうかも知れない。いや、

期待している訳ではないが、僕ほどの人間にもなればその可能性は十分に有り得る。

そうだ、京都へ行こう。

…夢を膨らませてる内、夢は僕を包み込み、僕はいつの間にか夢に沈んでいった。

第二幕

夢猫：え？ 観光名所ですか？

夢猫：そりや金閣寺、銀閣寺、清水寺と回って、鞍馬で天狗にでも拐われれば अच्छいと思えますが…どうしたんですか急に？

ken：ふむ。いや、たまには旅行でもしてみようかと思ってな。

夢猫：…せ…先輩が旅行計画なんて。

今夜は雪ですね。

ken：オイ、今9月だぞ。ていうか流したけど天狗はないだろ。
天狗は。

夢猫：いますよー。天狗は。この前も見ましたもん。

ken：ホントかつ！

夢猫：ええ…あれは金曜の夕暮れ、裏山の奥の暗がりから天狗が鋭い眼光でこちらを睨んでいたのです。

ken：うむ。

夢猫：負けずに視線で応戦したら、15分くらいして、すごすごと山に帰っていきました。あれには流石に冷や汗を掻きましたねえ。

ken：勝ったのか！ 凄いな！

夢猫：フフ、敬うと良いですよ。

ken：ところで本業の方の調子はどうなのだ？

本業、とは言っても引きこもりの夢猫に仕事がある訳もない。夢猫は普段、有り余る時間を使って小説のようなものを書いていて、あちこちの公募に応募しており、時々佳作に入選もしているらしく、ここでの本業とはそれを指している。

もつとも、僕は彼の文章を読んだことはないのだが。

夢猫：まあボチボチですよ。ボチボチ。

ken：またスランプか。

夢猫：分かりますか、流石先輩。

ken：長い付き合いだからな。

夢猫：そっか、もう一年にもなりますか。

そう、一年。思い返せば本当に長い付き合いだ。僕はふとその始まりを思い出す。

大学二年生の夏、すっかり打ち解け切った同回生が「ウフフ、キヤハハ」とウフキヤハトークに花を咲かせる中、僕はかつてない危機に直面していた。

危機とは先に述べた通りだ。皆々様におかれては、学校に足を踏み入れてから帰宅するまでの間、一度も口を開いていないことに気付いた時の、あのどうしようもない虚脱感…更にそれが週に何度も繰り返す虚脱生活など想像も付かぬことだろう。

流石の僕も脱力し過ぎてタコになるかと思つた程だ。

入学当初はキラキラと輝いていたマイハートもすっかりヘドロのように汚れ、その得体の知れない淀みからいつ新たな魔王が誕生してもおかしくない状況だった。

溺れる人は藁をも掴む。そんな時、僕が目にした藁がインターネツトだった。

そこには果てしなきコミュニティーが、年齢や立場を超えた人々の繋がりが確かにあった。余計な刺々しさや呆れるような無意味な煽り、不毛な中傷も溢れてはいたが、それでも、今や取り返しのつかなくなつた大学生活の現状よりもずっとずっと、可能性に満ちて見えた。

しかし、これもまた先に述べた通り、僕には新たなコミュニティーに入り込む能力が決定的に欠如している。仮想現実においてもそれは変わらない。チャットや掲示板、日記サイトを読んで溜め息を漏らす日々。

だが、そんな日々が一月程続いた頃、僕は遂に一念発起して行動を起こすことにした。勿論、いきなりの本番など無理である。予行演習の予行演習を行うことにしたのだ。

予め当たりをつけていた「フクロウ亭」という名の個人サイトがあった。最終更新日は一年半前。簡単なチャットを備えているものの、すっかり寂れた個人サイトだ。

町で例えるならドラッグストアの裏の草場の陰のような、ここなら誰も来まいと言うような、そんなサイト。チャットの予行演習には持ってこいだった。

：動悸を抑え、恐る恐るチャットに入り込む。キーボードを打つ手が重い。入室しないとログが見えない仕様のため、一年前の会話のログを初めて目にする。凄まじく荒れている。インターネットは怖い所だ、と改めて思い震える。

無言でいるのもなんなので、「こんにちは」「誰もいないのかなー」と打ち込む。虚しい。当たり前だ。

ややあつて退室しようかと思った時、予想外の反応があつた。

メッセージ：夢猫さんが入室しました。

夢猫：こんにちは、先輩！ お待ちしとりましたよ！

僕が度肝を抜かれたのは言うまでもあるまい。だが、機会と言うのは不思議な力を持つもので、何だかんだで夢猫とはそのまま打ち解けて、今に至る。

因みに、彼が僕を先輩と呼ぶのは、このチャットに先に入った先輩と言う意味であり、僕を見つけるまで、彼は寂れたサイトの寂れたチャットにこっそり入り込むような人間を探してネットをふらふら徘徊していたらしい。恐るべき変人である。

後で分かったことだが、彼は京都に住む引きこもりで歳は僕の一つ下。名実ともに先輩は後輩であった。

閑話休題、話は再び現在へと戻る。夢猫と旅行について話した日から2週間ほど経って、僕はいよいよ飛行機の手ケットを入手した。出発日は11月の中旬、紅葉を見るためだ。現実味を増してきた旅行にホクホクとした気持ちでアルバイトに出る。この日は須田さんのシフトであった。

須田さんはバイト先の先輩にあたる同い年の女性だ。ここで「女の子」と表記しなかったことには、大いなる理由がある。

須田さんは僕が知る限り、究極の堅物なのである。

小さなパーツの並ぶ整った顔立ちにベリーショート黒髪をこれまたぴったりとヘアピンで整え、そこに銀縁眼鏡がちょこんと乗っている。

終始事務的な口調を貫き、こちらまで敬語を使わねばならぬよう

なオーラを発している。割とべろんべろんに酔ったお客さんでさえ須田さんに対しては妙ちくちんな敬語を並べる様を見て、僕はその空間を密かに須田ゾーンと名付けた。

これで更に国立大の法学部に通っているのだから、余りにも典型的過ぎて感動さえ覚えたものだ。

勿論、仕事ぶりも凄まじく、彼女とシフトが当たった日には僕の仕事量が70%になる。どこぞの渡辺さんとは大違いである。

店内の通路には入荷した商品が並んでいる。僕はユニフォームに袖を通し、ぼんやり旅行に思いを馳せながら商品陳列を始めた。

…しかし、商品を並べながら改めて思うに、コンビニとは不思議なお店なのだ。

コンビニ…正確にはコンビニエンスストアは現代消費社会の末端にあたる機関である。それはヒーロー特撮の悪の組織に例えれば「イーッ！」と鳴く戦闘構成員にあたり、スルメで例えればゲソにあたろう。

そして、その末端というポジションは、余計な想い入れや感情を排して組織を観察するには最適の位置なのだ。

アルバイトを始める前はコンビニは単に町の便利屋さんといったイメージが漠然とあるだけであつたが、いざ潜入してみて僕がそこに見出だしたのは、社会の気味の悪さであつた。

段ボールに記載された事務的な注意書と、カラフルな商品の馬鹿げた賑かさの違和感。新商品に添付される購買意欲を刺激するため

だけに存在する無数のPOP、それをいかに効果的に見せるかの綿密なアドバイス。

パッケージでは笑顔のキャラクターが微笑むが、売れない商品が隅から消えていく弱肉強食。消費者と販売者、客と店員、お金と商品、二面性の二枚舌。

それらは実にうまく出来ており、けれどその上手さが、僕には何だか酷く気味が悪く感じられるのだ。

「…さん、…」

「斉藤さん、レジお願いします」

思索に耽りつつ商品を並べていると、遠くから声がする。呼ぶ声の方に顔を向ければ、須田さんが並んだお客さんの合間から顔を出している。

はて、と思つた後、血が凍った。

慌ててお客さんを捌き、その後、引き吊った笑みで、そろそろと隣の須田さんに視線を向ける。

すると、須田さんはこちらを冷たく一瞥した後、「何ぼんやりしてるんですか。確りして下さい」と怒るでもなくなしなめた。

途端、体温が更に5度下がる。下手に怒鳴られるよりも僕はこの冷凍ビームが堪える。「すみません…」と謝り、しょんぼり商品陳列に戻る。

この歳でこんな高等技術をマスターしているとは…ほんと同年とは思えない。恐るべき須田さんである。

夢猫：あははは

ken：笑い事ではない。

夢猫：はは、すみません。面白くて、はは。

夢猫：でも、前から言おうと思ってましたけど、その同僚さんって先輩とどっか似てるんじゃないですか？

ken：冗談、僕はあんなにお堅くないし、頭も要領もよくないぜ。

夢猫：まあ、頭と要領については大いに同意しますが…

夢猫：でも、ガツチガチなのは多分に一緒ですよ。柔軟性が足りとらんです。酔を飲むといいです。

ken：どさくさに紛れて酷い言われ様をした気がするが…まあ、そうかもなあ…

ken：しかーし！ 周囲に合わせていちいち変わるような自己など虚しいではないか！！ 自ら獲得した倫理、思考、価値観、それを深めずして何とする！

ken：諸君！ 不適応的だろうと何だろうと！ 私は私としてこの人生を乗り切る所存である！ 負けるものか！！ 負けて堪るか

！！　ウガー！！

夢猫：パチパチ

夢猫：…流石は先輩、感服いたしました。涙が止まりませぬ。

k e n：ご清聴有り難う。うむ、俺の背中についてこい！

夢猫：はい、きっかり25m離れて見守らせて頂きます。

k e n：…。

夢猫：そうそう、こっちはチラホラ山が色付き始めましたよー。まだ薄いけど、先輩来る頃には丁度見頃じゃないでしょうか。

k e n：ん、そうか。楽しみだ。土産くらい持ってくから、酒でも飲もうぜ。

夢猫：…ま、まあ、予定が合えば。

夢猫：それより先輩！　そろそろ講義じゃないですか？

k e n：あ、

k e n：やべ、ゼミ、死ぬ

k e n：い、行くわ

メッセージ：k e nさんが退室しました

夢猫：行つてらっしゃい。

メッセージ：夢猫さんが退室しました

ゼミは相変わらず退屈だった。周囲が何やら賑やかに熱く語り合う中、ひとりだけそれをフィルター越しに見ている。

妙な例えだけど、知り合いの居ない飲み会に参加した時と同じような、冷めた感覚。ゼミの性質上、必要に応じて発言もするけれど、口を開く自分も、自分の口から出たその言葉も酷く遠い。

取り繕える分、また厄介なのだ。上手くやろうと思えば思ふ程、仮面ばかり増えていく。

翌日は休日だった。ひとりなのは変わらないが、周りに誰も居ない自分自分のペースでいられる。

「同じひとりでもこうも違うんだよなあーふあー…」と、遅く起きた朝、欠伸をしながらひとりごちる。

その日は所用を済ませつつ、本屋へ寄ってみた。旅行計画を立てるためだ。

かつてどこぞの偉い人は言った。「敵を知り、己を知れば百戦危うからず」

己のスペシャリストたる僕としては、主目標である京都を知らば旅行のひとつや二つなど屁のかっぱである。

…ふむふむ、東福寺の紅葉に南禅寺の琵琶湖疎水、嵐山も捨てがたい。京都タワーなんてあるのか。登れるか。カップルしかないであろうなあ。おお、やはり錦市場にも行かねばなるまい。

などとブツブツ呟きつつ立ち読みしていると、

「ん、斉藤君じゃないの？」

「ナベさんの知り合いっすか？」

と、背後から急に呼び掛けられ心臓が縮む。

オドオドと視線を上げると、そこに居たのは見知った顔。バイク関連の雑誌を手にした渡辺さんがいた。そして隣には肌を焼いた見知らぬオニイサンがいる。お友達であろう。

「ああ、バイト仲間でさー」

「へえ」

ドモドモと、何だか阿呆のような挨拶をする。渡辺さんは目ざとく僕が手にした旅行雑誌を見て、

「おー、旅行雑誌かー。ほんと旅行行くんだ。いいねえ」

と言ってくる。

すると、それにお友達が反応した。京都、京都ねえ、と呟き。僕の持っていた旅行雑誌をひよいと取り上げてペラペラ捲ると、「ココ行くといいよ。スッげえ美味いから」と別のページを開いた。後ろから覗いた渡辺さんが、「オイオイ無理だろこれは」と唸ってい

る。

どれどれと目をやると、そのページで紹介されていたのは行列の出来る抹茶パフェであった。特製抹茶ソフトに抹茶アイス、小豆のコーボレーションは見ているだけでよだれが出そうだ。確かにいい。

…強面で体格のいいオニサンが至福の表情で抹茶パフェをモフモフしている姿は想像し難いが、抹茶好きに悪い人はいまい。改めて人は見た目によらないものだなと思う。

その後も幾つか名所やら名物を教えて貰い、お礼を言って渡辺さん達と別れた。本屋を出れば10月も半ばの涼しい風が気持ちいい。僕は戦利品である旅行雑誌を抱えて帰路に着く。

西日が妙にぽかぽかしているので、歩きながら理由を考えていると、暖かいのは西日ではなく胸の内だと気付く。思えばチャット以外であんな風に普通に人と話したのは、久しぶりであった。

ホクホクとした気持ちで川沿いを歩き帰宅。

しかして直後、内なる僕にハイアーセルフが全力ストレートを打ち込み。浮かれる僕はマットに沈んだ。

…彼は言う。貴様は何をホクホクしとるのだ。たるんでおる。今までの努力を無にするつもりか。性根を叩き直してくれよう。

確かに長らく人間としてアレな状況に身を置くと、幸せの敷居は

下がってくる。しかし、それは偽りの幸せである。

自由のない人間が若干自由を得れば、そりゃ幸せだろうが。その幸せとあの幸せはなにか違う。それで真に幸せになれるなら拘束衣はバカ売れであろうし、座敷牢ブームがやってくるのが道理だ。

深海魚を想像せよ。深い深い深海にも稀には仄かな日差しが射し込んでくることもある。それは彼らには神々しく、眩い光にも見えよう。

しかし、それを後生大事にしても、遥か地上には抜けるような青空の下、生を謳歌する生き物が掃いて捨てる程いるのだ。

深海魚は気付かず満足して一生を終えようが、こちらら情報化社会を生きる人間様よ。

やつらは臨終の席まで図々しくやって来て、耳元で真実を告げよう。やつらって誰だ？知らぬ。しかし臨終の席までやって来て、きつと善意に満ちた得意気な顔で告げるのだ。

「とても悲しいことだけど、あなたの人生は無意味でした」と。

深海にいるなら深海にいるなりに、深海にしかないものを探さねばならない。僕は僕の幸せを…いや、最早幸せに限るまい。

なにかを、見付けねばならない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8844y/>

犬と猫

2011年11月27日17時46分発行